

# 未来表現の指導に関する一考察

## On how to teach “FUTURE” expressions

山 田 正 義

キーワード：中学英語と remedial 教育、未来時制か未来表現か、指導の留意点

**Key words:** Future Tense vs. Future Expressions, English education in junior high schools, remedial education in universities

### ABSTRACT

There have been a lot of discussions about the “future tense” in English grammar and TESOL, that is, whether there exists such a tense or not. Surveying those discussions from a historical and a linguistic point of view, this report seeks for better and more effective ways of teaching future expressions in remedial English education in universities, keeping in mind the Education Ministry guidelines, based on which college students were trained before entering universities.

## 0. はじめに

大学における英語基礎教育、または remedial 教育の必要性が叫ばれて久しい。しかしながら、その実態が中学や高校での教育基盤に立っているかというといささか危ういものがある。

本稿では、文法における未来についての指導法を取り上げ、「未来形」「未来時制」に関する論争の歴史的概観を踏まえ、大学で使用されている基礎英文法教科書についての現状と、中学校教科書や学習指導要領での扱いとを比較し、これからの大学における指導法について考察するものである。

## 1. 呼称の問題：未来時制 vs. 未来表現

### 1. 1 これまでの論争

英語における時制の捉え方はさまざまな論議を呼んできた。たとえば、過去多くの英語文法書では「過去時制、現在時制、未来時制」の3時制が扱われてきた。

「英語の時制は普通には、現在時制 (Present tense)、過去時制 (Preterite tense)、未来時制 (Future tense) の三つに分けられる。現在時制と過去時制ではその形態的特

徴は比較的統一的に語形態に示されている。未来時制は *shall*, *will* と動詞の原形 (Root form) との結合による。この未来時制を一つの文法範疇と認めるかどうかについては学者の意見は必ずしも一致していない。それは *shall*, *will* が独立した語と認められうるからであり、従って個別的な *shall*, *will* に関する語彙的な問題であると考えられる」(福村 1976 : p.1)

*shall*, *will* + 動詞の原形を未来時制と捉えることについては、次の反論もある。

「動詞に関し時 (time) の区別を示す種々の形を *tense* といふ」(大塚 1974 p.73)

「現代英語の動詞の *tense* は *past tense*, *present tense* の二種しかない」(*ibid.* p.77)

「*I shall do*, *He will do* は *tense* から言へば *present* である。併しこれ等は、*I do*, *I did* の *present* 及び *past tense* が *present time* 及び *past time* を表はすといふ意味で、*future time* のことを表はすのであるから、*future tense* であると言った場合には、形態に與へた *tense* なる名稱は、その内容に與へられたことになつて来る。(中略) 然うでなくて形態に與へた名前だとすると現代英語には *past*, *present* の二箇の *tense* より他にはないことになる」(*ibid.* p.78)

つまり、*like* という *bare infinitive* は、過去形 *liked*、現在形 *like(s)* の形態をとり、未来については *will [shall] like* となる。過去形、現在形と比して、これは *like* 自体の屈折ではなく、*will*, *shall* という助動詞が加わっただけである。これを「未来時制」と呼ぶということは、動詞の屈折、つまり形態の変化ではなく、「内容」が変化したことに対して呼称を与えるということになるので、過去形、現在形とは一線を画すべきだとの意見である。これについてはさらに以下の意見がある。

「*Shall*, *will* の問題をつらぬいて中心の軸となるものを求めれば、それは未来時制の問題となるであろう。従って現在においてもなお英語に純粹の未来時制が存在するかどうかという問題が繰り返えされ、しかもそれは決定していない」

(榎井 1976 : p.1)

ところが、手元にある数種の *remedial* 教育用大学テキストには、1976年当時とそれほど変わったとも思えない記述の混乱がある。何の説明や根拠もなく「未来時制」や「未来形」と明記したテキストが数多く見られる。これについては2. 1で詳細を見る。

ここでは、英語における「未来」表現の問題についてももう少し見ていきたい。まずは、上で挙げた *will*, *shall* とその周辺の助動詞を歴史的に概観する。

## 1. 2 助動詞の素性

「古代ゲルマン語族では未来時制はなかった。そのもっとも古い言語では現在時制が未来のことを表すのに用いられた (大塚 1974 p.4)」

未来を表す際に用いられる will や shall などの「助動詞」と呼ばれるものが、かつては動詞であったという事実を見逃してはならない。とくに Jespersen や Onions らはこれを重視し、たとえば、I can swim. は can が動詞で swim という bare infinitive をとると考えた。OED によれば、can はもともと 'to know, know how, be mentally or intellectually able', であり、'whence 'to be able generally, be physically able, have the power' と考えられる。同様に 'may は 'to be strong or able, to have power' で、「…の力がある」「…の権力がある」。よって「～できる」となるが、この意味を can が持つことになり、新しく「許可」「可能」の意味を持つに至ったと考えられている。must はもう少し複雑である。

must は mote という動詞の過去形であり、OED “mote” の項には、“The primary sense seems to be that preserved in Gothic, from which the sense ‘is permitted, may’ can easily have been developed. The transition from this to the sense ‘is obliged, must’ is more difficult to explain; it may have arisen from the use in negative contexts, where the two senses (‘may not’, ‘must not’) are nearly coincident.” とある。must が現在時制 (ときに未来にも言及) に用いられるようになったのは、仮定法用法。そうすることで義務の意味をやわらげるためであったという。

ここまでくると、shall, will の姿も想像できる。元来の動詞としての意味を確認する。shall は古代ゲルマン語 skal (skila の直説法過去) で、skal 「人を殺した」→「罰金を払わなければならない」「負債を持つ」→owe となった。この原義ゆえに、今でも米英問わず法律や契約でよく用いられると考えられる。

英国文学 (Shearer 2001: p.108) では次のような場面でも用いられている (下線筆者)。

(姉と喧嘩して事故死した少年が死後の世界 the great blue yonder に旅立つ前に地上のともだちに別れを告げるシーンで)

‘Goodbye, everyone,’ I said. ‘Bye, Pete, bye, Olivia... (中略) ...I hope you look after my desk and my peg and the space for my lunch box. I certainly shan’t be needing any lunch any more... (後略)’

will は to desire, want, wish などの意味で、現在でもこの用法は見られる (下線筆者)。

①Go out, Deet. / He willed him to go. (Shearer 2005: p.112)

②Laura nodded, then both mouthed the words *good-night* as they wandered to their own

beds. As she tried to sleep, cold and alone with Bob downstairs, Laura couldn't get the thought out of her head. Can a person really will himself to die?

(Wright 2002, p.95)

上述の、かつて「未来時制はなかった。そのもっとも古い言語では現在時制が未来のことを表すのに用いられた」のは、実は元來動詞の現在形である助動詞が動詞の原形と結びついた形と考えれば、「動詞や助動詞の現在形は未来について言及することができる」と言い換えることができる。このように、(助)動詞の現在形が未来を表すなら、「未来時制」「未来形」という呼称がいかにあいまいであるかということが言えよう。

次に「未来時制」「未来形」は存在するという立場から、もう一度、上記の内容を確認したい。

### 1. 3 「未来時制」容認派の意見

織田 (2004) によると、上記の will+動詞の原形は次のように捉えられる。

- ①I'll go のような場合、動詞の前に prefix 的に 'll [ 1 ] という形態素がついた未来形と見ていいのではないか。「lateral-prefix + stem」が英語未来時表現の動詞形ということである」(織田 2004 : pp.39-40)
- ②shall は一部の用法 (Shall we / I ~?) 以外に、通常は使われない。上にあげた法律や契約の例も含めて、modal として扱い、単純未来は will のみで考えられる。
- ③be going to, be about to などは、現在時制にも完了や進行があつて、現在時制を「分割共有 (織田 2004 : p.41)」しているように、未来時制を will と分割共有していると見ることができる。

形態論としては、先に述べた like の過去形 liked、現在形 like(s)、に対し、'll like という形で説明している。また、

過去 : He studied... / Did he study...?

現在 : He studies... / Does he study...?

未来 : He'll study... // Will he study...?

という叙述、疑問の変化もうまく説明できるように思われる。

しかしながら、時制と動詞の形態変化を併せ定義する、すなわち「動詞の屈折」という点 (study や like そのものの語形変化) では全てをカバーしきれず、また、「意志」を強調した場合の Will you really do that? / I will. (will に音的強勢が置かれる) などの will の働き (未来でもあり、意志でもある) を prefix 'll では表現しきれない。

これらは何も英語のみに見られる特性ではない。次に我々の母語日本語の時制の捉え方を見よう。

## 1. 4 日本語における時制の定義

実は「英語の時制は過去と現在の2時制」は、何も英語だけに限ったことではない。日本語も同じなのである。

	夕形	ル形	
	過去	現在	未来
動作動詞	書いた	(書いている)	書く
状態性述語	あった	ある	(ある)
	若かった	若い	(若い)
	学生だった	学生だ	(学生だ)

「上の表からもわかる通り、基本的に日本語のテンスは過去・現在・未来を表すのにル/タの対立——非過去/過去の対立しか持ちません。このため、『いく』や『書きます』の形を“非過去形”と呼ぶことがあります」(井口他 1994：p.60)

ここでは、「過去」と「そうでないもの」、つまり、現在と未来は連続体で捉えられている。この思考様式は英語にもそのまま当てはまるのではないか。すなわち、日本人英語学習者が時制を考えると、わざわざ「未来時制」を持ち出さなくとも、過去と現在、そして、現在形が未来を表すことがあるとしてもそれほど混乱は生じないと思われる。

同時にこれは未来表現に充ててきた「～するだろう」「～するつもりだ」という日本語訳すらも不自然であると言える。

次に、大学の教科書、主に remedial をねらいとした、「基礎英文法」の立場から解説した教科書をいくつか見てみる。これら教科書は中学校の英語からやり直そうという趣旨で作成されており、そこで「未来」がどう扱われているのかを見ることが目的である。

## 2. 教科書の実態～大学と中学の教科書比較～

### 2. 1 大学教科書、主に remedial 教育用教科書における「未来」の扱い

手元にある複数の大学教科書を見ると、文法教科書にとどまらず、TOEIC 対策本などでも、とくに解説もなく普通に「未来時制」「未来形」という呼称が用いられているものが多い。

たとえば、角岡他 (2009)「英語が好きになる英文法」という教科書には以下のようにある。

「時間には『過去—現在—未来』という流れがあることは直感的に分かりますね…(中略)…文法で、時間の流れに関わる体系を『時制』と言います。日本語では、現在時制が動詞の言い切り(終止形)で表されるのに対して、過去時制と未来時制は助動詞の助けを借ります。たとえば現在形の『歩く』というのはカ行五段活用の終止形ですが、過去形の『歩いた』、未来形の『歩くだらう』というのはそれぞれ『連用

形+助動詞』、『連体形+助動詞』の組み合わせで表されています」(p.31)

これは、1. 4で見た、日本語は「過去・現在・未来を表すのにル/タの対立——非過去/過去の対立しか持ちません」との考え方とは異なる見方を示している。1. 4で提示した考えが一見解にすぎないとしても、「歩く」の未来形が「歩くだろう」とは画一に過ぎる。「毎日1時間歩く(現在の習慣)」「あの交差点で車を降りて歩く(未来)」の差をどう説明するのだろうか。また remedial を考える教科書として、英語に直接関連しない「連用形」「連体形」という概念を持ち出すのも疑問を感じる。学習者(この場合大学生)は英語は苦手でも国文法の用語には習熟しているということだろうか。さらにこのあと次のように続く。

「一方、英語は現在形と過去形は動詞の活用によります。未来形は、日本語と同じように助動詞が付きます」(p.31)

「…未来のことを表すには、will など助動詞の助けを借りなくてはなりません」

(p.33)

助動詞に集約することで学習者の負担軽減を図ろうとしているのだろうか、では be going to, be about to さらに進行形による未来などは扱わないのだろうか。事実このあとの練習問題には will / shall, must, may の助動詞を用いたものだけが用意されている。must, may まで用意されると学習者には「未来には助動詞を用いる」とだけ刷り込まれてしまう懸念がある。

このテキストだけではない。中郷他(2008)「読める英文法・聞ける英音法」には「未来時制」という語は用いないまでも、次のような記述が見られる。

「未来の出来事を表すには、(9)のように will を用います…(中略)…また、will の代わりに [am/are/is +going to] を用いて未来の事柄を表すことがあります…(中略)… will も [am/are/is +going to] も未来の事柄を表しますが、その用法には少し違いがあります。will は近い未来と遠い未来の両方の事柄について用いられますが、[am/are/is +going to] は近い未来の事柄についてのみ用いられます」(p.30)

先ほどのテキストと比べ、will, be going to の両方とその違いに言及している点は評価できるが、その内容に問題がある。そして以下の文が問題に用意されている。

「(4) I'm going to apply to three universities this year.」(p.31)

これは「近い未来」だろうか。では、今ここで電話がなったとして "I'll get it." と will を使って答えたとき、これと比べて(4)ははたして「近い」「遠い」どちらの未来になるのだろうか。

手元にある最新の2010年度向け教科書である芝垣他（2010）では

#### 未来形

- ・未来形とは、未来、意志（…しようと思う）、推測（…するだろう）。義務、命令などを表現したいときに、will などを使うんだよ。

#### 近接未来形

- ・近接未来形とは、まえもって意図（…するつもりである）や計画性（…しようとするところだ）があるときの表し方だよ。be going to を使うんだよ。（p.16）

remedial とは言え、大学生向けの日本語の記述表現として妥当かどうかはさておき、先の2書に比べ、will, be going to の違いが明確にされているのは評価できる。が、その分類は、言葉づかいと比べて、細部に分類されすぎではないだろうか（はたしてそこまで細かく覚える必要があるのだろうか）。

では、学習者が初めて「未来」の表現に出会う中学校の現場ではどうなっているのかをしてみる。

## 2. 2 中学校教科書と学習指導要領

ここ数年で何度か中学校教員、高校教員とこの問題について話し合う機会があった。そのとき、多くの中高の英語教員が「未来時制」「未来形」ということばを用いていることから、教育現場では「未来“時制”」という呼称はまだ用いられていると思われる。中高の学習参考書なども同様である。

現場の先生方からは「どう呼ぶかについてはこだわらない、むしろ生徒たちの理解しやすいように、簡単に未来形、未来時制と呼んでいる」との声もある。しかし、それでは、生徒に動詞の変化表（原形、過去形、過去分詞形）を覚えさせ、「get の過去形は？」や「get の過去分詞形は？」としながら「get の未来形は？」と聞くことに抵抗はないのだろうか？（実際は過去形、過去分詞形は尋ねるが、未来形を尋ねることはないとのことだが）。

現行の文部科学省検定済み中学校英語教科書を見てみよう。

### <検定英語教科書の記述>

#### (1) Sunshine 2（開隆堂 2005 p.95）

巻末資料1）文法のまとめ 2. いろいろな「時」の表し方

（5）これからのことについて言う時

a. 「～するつもりである」とか「～することになっている」など、すでに決まっていることを言うときには、<be 動詞+going to+動詞の原形>を使います。この形は、いま決めたばかりのことには使いません。

b. 「～しようと思う」と気持ちや考え、いま決めた予定などを言うときは、<will+動詞の原形>の形を使います。

(2) New Crown 2 (三省堂 2005 pp.85-86)

文法のまとめ Lesson 3

1 「～するでしょう」と未来のことを説明する時は<will+動詞の原形>を使って表します。will は can と同じように主語が何であっても形はかわりません。

2 「きっと～する」と確実に何かが実現する未来を表す時には<be 動詞+going to+動詞の原形>を使います。

(3) New Horizon 2 (東京書籍 2005)

いろいろな時制 (p.18) のなかで、be 動詞の過去形のすぐあとに

・未来を表す「be going to +動詞の原形」

Lesson 4 の基本文説明のなかで

「will+動詞の原形」で「…します」と未来のことを表す。

(3)は(1)(2)の記述に比べ、ややあいまいな記述となっている。とくに be going to のカテゴリーは「いろいろな時制」の中の、be 動詞の過去形のすぐあとにあることから学習者が時制の一つ、すなわち「未来時制」と結びつけてしまう懸念がある。ただし、3年の教科書の「基本文のまとめ (p.106)」では「現在形」「過去形」とは別の個所で「未来表現」という呼称が用いられている。

これら検定教科書の礎になっている現行学習指導要領を見てみる。ここでは以下のような位置づけを行っている。

<平成20年3月告示 学習指導要領の記述>

(3) 言語材料の(エ) 動詞の時制など

現在形、過去形、現在進行形、過去進行形、現在完了形および助動詞などを用いた未来表現 (文部科学省 2008, p.110)

「助動詞などを用いた未来表現」(下線筆者) という記述になっており、「未来時制」「未来



形」という呼称はどこにも見られない。中高の一部の教員たちに根強く残っているこれら呼称は、前述のように「生徒たちの理解しやすいように」という個々の配慮からきているのかもしれないが、指導要領と異なっていることは案外自覚されていないのも事実である。

大学教科書も同じく「学習者の理解しやすいように」との観点なのかもしれないが、中学校教科書出版3社の記述と比較しても、いかに remedial とはいえ、あまりに単純化しすぎてはいないか。また will と be going to の違いについても、中学校テキストよりもあいまいにしすぎている感がある。

中学英語と高校英語の連携は英語教育界において長い歴史を持つ。そして今なお両方の教員や大学教員を交えて模索している状況である。ここに「小学校英語」という要素が加わり、小中高という連携が新しい課題となっている。一方、中高大という連携もまた長い歴史を持っている。しかし、中高において英語習得に困難を覚えた生徒の大学入学が増えている現在、そしてその背景を踏まえた remedial 教育が叫ばれている現在、その連携がうまく機能していないのではないだろうか。

大学生たちは、中学で指導要領に基づいた検定教科書を使って学習してきた。たとえ大学入学時に中学校の内容を忘れていた可能性があっても、基礎になる中学校での指導とは異なる記述や指導を行うことは、学習者に混乱を与えかねない。

また、学習者の成熟年齢も中学生と大学生は異なる。基礎的な文法の復習とはいえ、内容や記述は大学生の知的水準や知的好奇心にふさわしいもので行いたいものである。

### 3. 大学における「未来表現の指導」についての一考察

#### 3. 1 語学専門学校における指導例から

かつて語学専門学校で基礎翻訳の授業を講義したときの経験から、そのときに使った例文を用いて、授業で提示する「未来表現」の例文とその指導について述べてみたい。

##### 3. 1. 1 will の指導

画一的に「～するだろう」と訳すのはやめる。

「参考書には、ウソが多いのである。

たとえば、私のよく使う英和辞典 will を引いてみると、まず、こんな『ウソ』の定義に出会ってしまう。

『will 1 《単純未来》 (1) …だろう、…でしょう』

おもわず『バカ言え、んなわけないだろう?!?』とクレームをつけたくなる。

はっきり言えば、will に、『…だろう、…でしょう』という言葉の意味はないのだ。」

(マーク・ピーターセン 2003 : p.82)

2. 1 で見た角岡他 (2009) における記述「たとえば現在形の『歩く』というのはカ行五段活用の終止形ですが、過去形の『歩いた』、未来形の『歩くだらう』」は、かように批判の対象となる。ピーターセンの説明を待たずとも、日本語のネイティブである我々が、より自然な日本語で訳そうと思えば、“Don't worry—I'll help you.” は、普通は「大丈夫だよ。僕が手伝うから」であって、「僕が手伝うだらう」「僕が手伝うでしょう」はおかしいし、“I'll be 49 years old in October.” 「私は10月で49歳になります」であって、「私は10月で49歳になるでしょう／なるだらう」を自分で言うことはない。これは、ひとつには will をことさら「未来」というカテゴリーに入れようとするから、「…だらう、…でしょう」などとつけてきたような日本語が必要になるのだ。「will に、『…だらう、…でしょう』という言葉の意味はない」とすれば、より自然な日本語に近づく。また、1. 2 で見たように、will はもともと現在形の動詞であったということを教授者が踏まえて（必ずしも学習者に伝える必要はない）おけば、「～だらう」という訳を提示しないでもすむ。おそらく学習者にとってもより自然な日本語感覚に繋がる。

### 3. 1. 2 be going to ～を使う場合

be going to の to は不定詞だが、これは前置詞の to と語源的に同じであり、前置詞が「行動の行き先、方向」を示すなら、不定詞は「気持ちの向かう方向」と考えれば、

「be going to はすでに決定した予定を表すが、それほど確実性は高くなくてもよく、比較的先のことにも使える。進行形の be ~ing は心理的または実質的にすでに準備段階に入っている予定に用いる。したがって予定が実現されなかったことを言い添える場合は be going to の方が普通」

という定義（ウイズダム英和辞典 p.851 (go の項)）もうなずけるものとなる。そうすると、次の2文のうち、

① They were going to get married in June, but they couldn't.

② \*They were getting married in June, but they couldn't.

②が不自然に響くこともわかる。この点では、先にあげた New Crown 2 (三省堂 2005 pp.85-86)

2 「きっと～する」と確実に何かが実現する未来を表す時には <be 動詞 + going to + 動詞の原形> を使います。

の「確実に何かが実現する未来」はやや言い過ぎと言える。むしろ、Sunshine 2 (開隆堂 2005 p.95) の

a. 「～するつもりである」とか「～することになっている」など、すでに決まっていることを言うときには、<be 動詞 + going to + 動詞の原形> を使います。この形は、いま決めたばかりのことには使いません。

という定義のほうがふさわしい。

また、後半に述べられた「この形は、いま決めたばかりのことには使いません」に関しては、次の例文で説明できる。

③ Suddenly the phone rang. “Oh, I’ll get it.”

④ Suddenly the phone rang. \*“Oh, I’m going to get it.”

④はジーニアス英和辞典第4版では不可とされているが、be going toは「いま決めた（＝電話が鳴った時点で出ると決めた）ことには使」えないからである。あらかじめ電話が鳴ることが分かっており、その時間に電話に出る心算をしているといった少し特殊な状況になる。この例などは、実際に教室で、「今この場で電話がなったとしよう。それに『私が出ます』というときにはどちらが適切か」などと提示したりすると、学生たちも理解しやすいようだ。

⑤ ‘Well, I’m going next door to bed now, kid, but you don’t have to worry as I’ll be listening out for the Kidnappers...’ (Shearer 2005, p.70)

なども will と will be listening の比較に使える。「隣の部屋で寝るからね。でも心配しないでいい。(君たちが眠っているときも) 耳をすませて、子供攫いたちが来ないように用心しているから」(訳、傍線：筆者)

### 3. 1. 3 単純進行形が未来を表す場合

be ~ing は「すでに始まり、まだ終わっていない状況を示す」というコアを押さえる。

① “We are holding a party tomorrow night.” 「明日パーティをするんだ」

これは、すでに計画が始まり、パーティに向けて進行中していることを含意している。

この類の例としては、MacDonaldのコマーシャル “I’m lovin’ it.” も含まれる。これがテレビで流れたとき、普段教室で「like, loveなどは進行形にならない」と教えていた英語教員は啞然としたかもしれない。大修館書店の月刊誌「英語教育」2004年12月号 question box では I’m enjoying it. と解釈していたが、「すでに始まり、まだ終わっていない love の気持ち」と捉えれば、「どんどん好きになっていく」ととるべきかもしれない。類例は映画でも話題になった Da Vinci Code の原作にも見られる。

④ Langdon hurried along beside her. What had begun as a one-mile dash to the U.S. Embassy had now become a full-fledged evacuation from Paris. Langdon was liking this idea less and less. (Brown 2003: p.159)

最後の一文は「ラングドン（主人公の教授）はこの考えがだんだんいやになってきた」と理解される。

⑤ be ~ing / be going to / will が全て出ている文

‘Well! I’m going to sit here and watch while you play.’ Then she remembered something. ‘Oh, wait...no, you both carry on. I’m just going in to get the video camera.

We'll want to remember this, won't we, Paul? It'll be something to look back on.'

(Shearer 2005: p.99)

この文を見るとこれら3つの表現が巧みに使われていることがよくわかる。このセリフに伴う動作を学生に想像させ（あるいは見せ）ながら説明すると、①～④のことがよく理解できたようである。

### 3. 1. 4 その他の時制による connotation の違い

現在時制が未来を表す文の理解を促すには、現在時制が持つ「日常の習慣」を押さえる。その解釈を広げれば「スケジュールなどの確定的未来」も説明できる。

①The last train leaves at 24:00. 最終列車は24時に出ます

②現在時制と will を用いた文の比較に次の例文を使う。

What do you drink? / What will you drink?

前者は「(普段は) 何を飲んでるの?」に対し、後者は「(では今これから) 何を飲みますか」となる。映画007の第6作「女王陛下の007」でボンドが女性に What do you drink? という場面がある。これを例示すると、学生たちもいわゆる「使える英語」としての違いに関心を持ってくれたようだ。

### 3. 1. 5 未来表現の指導についてのまとめと考察

英語に「未来時制」はない。現在時制のなかの一つの相と捉えたほうが、合理的である(will, shall, may, mustなどの助動詞の「助け」を借りて未来を「表現」と考える)。日本語にも「未来時制」はなく、willの訳語として「～だろう・でしょう」を充てるのは混乱を与える。英語の未来表現の理解に画一的な日本語を与えることが誤解のもとになる。

単純に「英語の未来表現はこれから先に起こること・これから先の計画や心算などを表す」くらいの表現にとどめる。すると現在形、進行形、be going to、willが伝えるそれぞれの未来時制での「様相」は、それぞれがコアとして持っている基本的な意味・働きを押さえることで、なんら矛盾することなく、それぞれの意味・働きを理解できるようになるはずである。

## 4. まとめと今後の課題

今回とりあげた大学教科書は膨大な量の中ほんの一部である。しかし、本稿の1や2で見た言語学上の「未来」に関するさまざまな考え方に一番理解を持つはずの大学教員が作成しているのだから、もう少し記述に注意を払うべきではないだろうか。同時にそれらを使用している我々大学教員も注意しなければならない。先に述べたように、中高、今後は小中高、と連携した教育を受けた学生が混乱しないように、彼(女)たちが受けてきた英語教育を踏まえた教育を、我々大学英語教育に携わる者は行わなければならない。一番影響を受けるのは学生たち

なのだから。中高と違う記述・説明をしていて、何のための remedial といえるのだろうか。

今回取り上げた「未来に関する指導」は、英語教育における文法指導という分野の、さらに一部である。今後他の分野にも目を向けながら、これから本格的に始まる、「小学校—中学校—高校—大学」という大きな英語教育の流れの中で、より効果的な大学での指導法を考えていきたい。

## 参考文献

- Brown, Dan (2003) *Da Vinci Code*, New York: Doubleday
- 福村虎治郎 (1976) 『英文法シリーズ11. 時制と態 (第19版)』 東京：研究社
- 井口厚夫他 (1994) 『日本語文法整理読本』 東京：バベル・プレス
- 井上永幸他編 (2003) 『ウィズダム英和辞典』 東京：三省堂
- 河野一郎 (1999) 『翻訳のおきて』 東京：DHC
- 小西友七他 (2006) 『ジーニアス英和辞典第4版』 東京：大修館書店
- 梶井迪夫 (1976) 『英文法シリーズ 14 SHALLとWILL (第21版)』 東京：研究社
- 宮内秀雄 (1976) 『英文法シリーズ 13 法・助動詞 (第15版)』 東京：研究社
- 大西泰斗／ポール・マクベイ (2006) 『NHK 3か月トピック英会話 ハートで感じる英文法』  
東京：日本放送協会
- 大塚高信 (1974) 『英文法論考 (第22版)』 東京：研究社
- 大塚高信 (1979) 『英文法辞典』 東京：三省堂
- 織田稔 (2004) 『よみがえる学習英文法』 私家版
- \_\_\_\_\_ (2007) 『英語表現構造の基礎』 東京：風間書房
- マーク・ピーターセン (2003) 『英語の壁』 東京：文春新書
- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領 京都：東山書房
- Oxford English Dictionary 2nd edition (1995): Oxford: Oxford University Press
- Shearer, Alex (2001) *The Great Blue Yonder*, London: Macmillan Children's Books
- \_\_\_\_\_ (2005) *The Hunted*, London: Macmillan Children's Books
- Wright, Camron (2002) *Letters for Emily*: New York: Pocket Books

## 雑誌

「英語教育」(2004年12月号) 東京：大修館書店

## 大学英語教科書

- 中郷 慶他 (2008) 『読める英文法・聞ける英音法』 東京：英宝社
- 芝垣茂他 (2010版見本) 『始めよう！文法からコミュニケーションへ』 東京：センゲージラーニング
- 角岡賢一他 (2009) 『英語が好きになる英文法』 東京：英宝社

## 検定済み教科書

- New Crown (2005) 東京：三省堂
- Sunshine (2005) 東京：開隆堂
- New Horizon (2005) 東京：東京書籍